

# 「幻談」考

登尾 豊

## 1

久しく創作の筆を執らなかつた露伴の晩年に「幻談」(日本評論)昭十三年九月号)のあるのは、『経済往来』改め『日本評論』の編集人・下村亮一の手柄であつた。これを皮切りに「雪たたき」(十四年三月号)、「鷺鳥」(十四年十二月号)、「連環記」(十六年四、七月号)が同誌に発表されて、露伴文学の掉尾を飾る作品群が誕生することになる。正確に言うと、「幻談」は書いたものではなく、語られたもので、口述筆記または語り下ろしの作品である。それは作品の文体から容易に察せられることだが、露伴の体が不自由だったからではなく、次のような事情による。

下村の回想記『晩年の露伴』(経済往来社 昭和五十四年五月)第一部「露伴晩年の創作活動」によれば、(昭和十三年、それも真夏)、おそらく七月末か八月初めに下村は初めて小石川の蝸牛庵を執筆依頼に訪れた。

(何かを書いて欲しいが、それは随筆でも何でもかまわぬ。もし書くことがいやなら、お話しをうけたまわつてもよいのですがと、鄭重に依頼をした。露伴は、執筆については、言下に断つた。だが話の件については、そのうち考えて置こうと、首の皮一枚を残して、ようやくつなぎをとどめてくれた。)

ここで注目すべきは、下村の注文が小説に限られていない点である。「幸田露伴先生を囲んで」(『経済往来』昭和十年九月号)、「日本文学に於ける和歌俳句の不滅性」(『文学』昭和十年九月号)等の座談、「幸田露伴翁を囲んで」(『文学』昭和十二年八月号。後「文化勲章のこと」と改題)の挨拶、「文字と秦の丞相李斯」(昭和十二年五月十八日東京愛宕山放送局の放送講演。速記録は『改造』七月号)というラジカ放送等で話す露伴のおもしろさを知っていた下村は、何かの談話でももらえればいいという気持ちで(「お話し」)を持ち出したのであつて、小説の語り下ろしなどを期待して

のことでなかったと思われる。満七十一歳とはいえ、腕が不自由でもない作家が小説を口述するとは一寸考えつかない時代であった。ところが、(一週間ほどの間をおいて)再訪した下村に露伴は、

「夏場のことだから、涼しい話でもと考えてみた。一つ思いあたったからやってみよう。日をかえてやってみよう。」

と(お話し)の注文には応じる姿勢を見せた。しかし、この時も、下村には(涼しい話)の蘊蓄を披露されるくらいにしか考えられなかったのではなからうか。

口述は(八月の暑い日)、蝸牛庵の階下の八畳の間で行われた。(露伴が床を背に、私とその前に坐り)、下村の伴った衆議院の速記者平塚某が中間に机を構えるなかで、露伴は(煙管で煙草をくゆらしながら、やおら語りはじめた。

(略)はなしは巧みな講師よりも、まだまだ巧みなもので、何の淀みもなくつづけられ)たということである。この日の日付は、岩波書店の小林勇の日記体の回想記『蝸牛庵訪問記——露伴先生の晩年——』(岩波書店 昭和三十一年三月)の八月九日の記事に

〈午後先生のところへゆく。今日も下の室。間もなく玄関へどこかの記者が来て、女中になにかしきりにいつている。あとでできたら日本評論の記者で、明日速記者を

つれてくるからといって帰ったということだ。〉

とあることから、翌八月十日と特定することができる。この頃はまだ露伴の身辺にいなかった塩谷贊(土橋利彦)は、(あすももう一日このために使うことになったはずである。聞いた話では記憶が朦朧としているが、それ以上に

及ばないことは明らかである。できた枚数や内容から言つて二日は十分にかかり、二日でできても驚くべき早さではあるまいか。)

と十一日までかかったとしている『幸田露伴』下 中央公論社 昭和四十三年十一月)。露伴から後に聞いたのである。

下村によれば、(翌々日から)速記の反訳原稿が蝸牛庵に届けられ、露伴の加筆・訂正が始まった。小林の八月十三日の日記に

〈釣りの話などしたのは、速記者などにあまりむずかしい話をしてこまるだろうと思つたからだ。話しはしたが、ぼくは元來話の下手の人だから、結局大いに直さねばならなくて大困りだ。(略)朝から三回も原稿をとりに来る。これからまた少し見なければならぬ。結局自分で書いた方が早いからだ。)

という露伴の言葉が記されている。十一日まで口述に要したとすれば、(翌々日)は十三日であるが、その日に届けた

反訳原稿の加筆・訂正をその日に催促するのは無茶な話である。反訳の成った分が十二日中でも届けられていたのであろうか。〈題名は「幻談」と名づけられ、『日本評論』の九月号の縮切に、ぎりぎり間に合った〉(下村書)というから、雑誌社が急いでいたことは確かである。小林の八月二十四日の日記に〈日本評論のためにした先生の速記「幻談」が、新聞などに予告されているのでその話をした〉とあるので、その頃までには完成を見、八月中には掲載誌が出たことになる。

以上の経緯の底に、この作品が現実二人の人物を前にして語られたものであるという事実があることは動かせない。だとすれば、書き出しで〈皆さん方〉と呼びかけ、〈老い朽ちてしまへば山へも行かれず、海へも出られないでいます〉と言う語り手はほかならぬ露伴自身であり、設定された語り手ではないことになる。その意味で、「幻談」を小説と呼ぶのには多少の躊躇が伴い、随筆とも言えそうであるが、平易闊達な語り口が垣間見せる世界は小説的衝撃を与えてくれるものである。

## 2

〈斯う暑くなつては〉と語り出され、〈夏場のことだから、涼しい話でもと考えておいた〉という数日前の露伴の言葉

が頭にある下村亮一には、消暑法のあれこれか怪談の類が予想されたかもしれない。続いて山や海を持ち出されては、避暑の話かと思つたにちがいない。しかし、やがて、

〈深山に入り、高山、峻山なんぞへ登るといふことになると、一種の神秘的な興味も多いことです。その代わり又危険も生じます訳で、怖い話が伝へられてをります。海もまた同じことです。今お話し致さうといふのは海の話ですが、先に山の話を一度しておきます。〉

と進むと、〈神秘的〉(危険(怖しい)などの語が印象に残つて、避暑の話でもなさそうだと思えてきたであろう。あるいは遭難の話かとも思つたかもしれない。さまざまに期待を抱かせるこの前置きは巧みな語り出しである。

本題の海の話の前に山の話が語られる。E. ウインパー『アルプス登攀記』の最終第二十二章にある、マッターホルン初登頂からの帰途に起こつたパーティの内の四人の転落死事故と残つた人たちがその夜に見た空中の十字架架像の話である。露伴はここでは出典を明らかにして、多少説明を加えてはいるが、原著をほぼ忠実になぞつてゐる。『アルプス登攀記』は、浦松佐美太郎訳で岩波文庫から上下二冊本として、昭和十一年に出版されている(上巻五月、下巻九月刊)。塩谷賛によれば、露伴はこれを読んでおり、(露伴が読んだ本には文中の地図に朱筆で短い線を引いた

ところがある) そうである (前掲書)。

〈下山の準備にかかっていると、リスカムの上に空高く、非常に大きなアーチの形が現れて来た、色もなく、音もなく、かすかではあったが、しかし雲に隠れた部分を除けば、その形ははつきりしていた。この神秘的な幻影は、あの世から現れて来た幻のように思われた。見ているうちに大きな十字架が、二つ並んで静かに現れて来た。私たちは呆然と眺めていた。殆んど肝をつぶさんばかりであった。もしタウクワルダー親子が、最初にこれを見つけたのでなかったら、私は自分の感覚を疑ったことであろう。タウクワルダーたちは、これは遭難事故と、何か関係があるのだと言った。私は、しばらくたつてから、これは私たち三人と何か関係があるのかもしれないと考えた。しかし私たちが動いても、その幻影にはなんの變化も起こらなかった。幻影の形は、少しも動かず、そのままの姿であった。それは恐ろしく、そして不思議な眺めであった。〉

いま昭和四十一年十二月改版の最新新かな版から十字架出現の場面を引いたが、「幻談」では次のように敷衍されている。

〈ペーテル一族の者は山登りに馴れてゐる人ですが、その一人がふと見るといふと、リスカンといふ方に、ぼう

つとしたアーチのやうなものが見えましたので、はてなと目を留めてをりますると、外の者もその見てゐる方を見ました。すると躰てそのアーチの処へ西洋諸国の人にとつては東洋の我々が思ふのとは違つた感情を持つところの十字架の形が、それも小さいのではない、大きな十字架の形が二つ、ありありと空中に見えました。それで皆もなにかこの世の感じでない感じを以てそれを見ました、と記してあります。それが一人見たものではありませぬ、残つてゐた人にみな見えたと申すのです。十字架は我々の五輪の塔同様なものです。それは時に山の氣象で以て何かの形が見えることもあるものでありますが、兎に角今のさきまで生きて居つた一行の者が亡くなつて、さうしてその後へ持つて来て四人が皆さういふ十字架を見た、それも一人二人に見えたのでなく、四人に見えたのでした。山にはよく自分の身体の影が光線の投げられる状態によつて、向う側へ現はれることがあります。四人の中にはさういふ幻影かと思つた者もあつたでせう、そこで自分達が手を動かしたり身体を動かして見たところ、それには何等の関係がなかつたと申します。〉

不思議な現象を科学的に説明できないかと考えたウインパーたちの行動も含めて、事実は原典通りに伝えられている。ウインパーはひとり(幻影)と呼んで現実として承認

したくない態度であるが、(恐ろしく、不思議な眺め)の説明がつかない以上、神秘体験として記憶せざるをえないであろう。今日なら、亡くなった四人を悼み彼らの安らかな昇天を祈る気持が描かせた共同幻覚と説明することも出来る。しかし一八六五年のキリスト教信者である彼らの心は、半信半疑ながら神の存在の暗示を受けた思いに傾いていたようである。その点、露伴は(心は巧みなる画師の如し)と「華嚴経」の(心如工画師)を連想して唯心論で説明しようとしている。すなわち、不思議な現象は心が描かせた(幻)だとするのである。

山の話については以上で終わるが、解釈とは関係のないことで一つだけ付け加えておくことがある。露伴は、ウィンパーがガイドの老ペーテル(ペーテル・タウクワルダー)の二人の息子のうちの年下の方をマッターホルン頂上アタック(一八六五年七月一四日)の朝、途中からツェルマットへ帰している(第二十一章)ことを見落としている。前日ツェルマット出発したのは八人であったが、頂上に立ったのは七人、転落死したのは四人、生き残って十字架像を見たのはウィンパー、老ペーテル、小ペーテルと呼ばれるペーテルの息子の一人の計三人であって、露伴が生存者四人とするのは誤りである。『アルプス登攀記』の内容をよく記憶していて巧みに語りえた彼が、ウィンパーが下山の順

序をちゃんと記している(第二十二章)のにもかかわらず、なぜこんなミスをしたのか不思議である。

### 3

海の話の主体は、釣竿の話である。若い日から釣を趣味とし、釣や釣道具、魚、海・川についていろいろ調べてきた彼の面目が発揮されている。例えば、かつては(かいづ) (黒鯛・チヌのこと)としていた(紀行文「かいづ釣の記」が明治三十四年にある)魚名を「幻談」では(けいづ)が正しいとするなど、研究もしていたようである。だからある釣竿の話にいたるまで、先を急がず、釣に関わるあれこれに触れてゆく悠揚迫らぬ語り口そのものにも味がある。

「蘆声」(『祖国』昭和三年十月号)の温かみにも似て、知識をひけらかすという印象はなく、心穏やかに引き込まれる話のはこびかたである。

話は(自分が魚釣を楽しんで居りました頃、或先輩から承りました話)で、(徳川期もまだひどく末にならない時分)に本所に住んでいた無役の、釣好きの旗本の身になったこととして語り出される。主人公の旗本と語り手の露伴の間に(或先輩)という伝達者のいたことになっている。

水死者の握りしめていた釣竿をもぎ取る話は、鈴木桃野「反故のうらがき」(嘉永二一八四九、三年に成稿)巻

一「きす釣」にあることが知られている。「幻談」以前に「反故のうらがき」の活字本はなく、三田村鳶魚編の二冊本『鼠璞十種』（中央公論社）に収められたのは昭和四十五年のことである。写本は、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本（都立日比谷図書館から移す）その他があつた。露伴が写本を見た可能性は充分にある。しかし、これを「幻談」の種本と断定するには問題がある。

「反故のうらがき」の「きす釣」全文は、新装版たる三冊本『鼠璞十種』中巻（中央公論社 昭和五十三年十月）によれば次の通りである。

「きす釣は工拙によりて獲物多少あれば、釣道具、釣竿に至る迄、六ヶ敷物なり。近来は左程迄六ヶ敷事もなく、多く涌たる年は、はげ同様に釣ることもあれども、一体釣にくき物也。故に釣竿の好きを選らみて、争ひて買ひ、餌一竿金一步も出るよし。これを持て出れば、衆にすぐれて獲物ある事なり。されども如此きは稀にて、皆三四匁位にて事を済す者多し。獲物は、其日の日並によりて、大体には獲物あることぞかし。或士釣を好みて、道具も相応なるを用ひ、獲物も相応に有りて、一日快く楽み、酒など取出て数盃を傾け、気げん一倍して釣けり。品川沖を東へと釣行けるに、手ごたへして引上るに、釣ばりとおもりと一具かゝりたるにて、魚はなし。其儘に引上

て、段々と引に、糸つきて竿出たり。又これを引に、余程よき竿にて、高金の道具と見ゆる。大事に引上、竿の元に至れば、堅く握り詰めたる片腕見えたり。其人も興奮めて見えしが、酒の力にか、胆太くも、其腕をとらへ、余り好竿なればおれがもろふと言いざまに、腕を引離ち突やりて、船を早めて乗りかへしけり。よくく見るに、勝れし釣竿にてつり合よし。思ふに、此人高金にて求めしが、如何してか過ちて溺死するといへども、此竿の惜しさに、堅く握りて死にけると思へば、吾も人も同じ物好の余り命を落とすといへども、執著するならんと回向して、矢張此竿を用て釣りに出るよし、語り伝へしを聞ける。」

（或士）は、寛政十二年（一八〇〇）生まれの鈴木桃野よりもっと古い人物であるらしい。この話を露伴はいつ知つたか。文献によつてとすれば、最も早いのは十代のころ通つた湯島の東京図書館の蔵書ということが考えられるし、中間に釣に関する文献渉猟の過程があり、また最も遅くは雑誌『史学』昭和七年十月、八年四月号の森潤三郎による光照寺（鈴木家の菩提寺）旧蔵の「反故のうらがき」稿本（戦災で焼失という）の紹介が考えられる。

しかし、最初に文献によつて知つたと断定することには疑問がある。（或先輩から承りました御話というのは単な

る言葉の彩なのであろうか。

小林勇の昭和十三年八月二十四日の日記（前掲書）は（あの話は今から百年くらい昔の話だ。もつと怪談めいて伝わった筋もあるが、あれは土左衛門が釣竿をもつていたというだけの話だ）という露伴の言葉を記録する。（土左衛門が釣竿を持っていたというだけの話）という点は「反故のうらがき」と齟齬しないが、異なる伝承があったとすれば、他の文献も見たことになり、あるいは口伝えて聞いた可能性もある。「反故のうらがき」が出所ではあっても、口伝えの間に尾緒の付いたものが露伴の耳に入ったとも考えられる。

塩谷贊の『幸田露伴』下には（堅く握っている水死人から竿を放すのに指を折るとしてありあとで「指折」というのをその竿の名にしようかと考えたようにしたのはもと露伴が先輩から聞いた話では指を切つて取るのでその名を「指切」とすべきだったがあまり慘酷に過ぎるから変えたと露伴から聴いた。直したのはその一個所だけである）と明らかに「反故のうらがき」にはない件が語られている。また、あくまで（先輩から聞いた）ことにこだわっている点を重視すれば、「反故のうらがき」に異本があるならともかく、「反故のうらがき」を「幻談」の唯一の典拠とすることはできないし、文献ではなく耳から得た情報に拠った可能

性を否定できない。

ではその（先輩）とは誰かとなると、不明とするしかない。いわゆる根岸党仲間の饗庭篁村・幸堂得知等が候補に上がるが確かめようがない。

先後関係は不詳ながら、誰か分らない（先輩）から聞いた話、「反故のうらがき」、もしあるとすれば別の文献から得た知識が混ざり合つて「幻談」の構想が膨らんだのではなからうか。

#### 4

だとしても、「幻談」は聞いたり読んだりした話の単なる再話ではない。「反故のうらがき」とはキス釣がケイズ釣になつてゐること、竿を見つけた日の釣果が不漁になつてゐること、竿を海に返したことが異なるし、（指折）云々の件肝腎の翌日の話が加わつてゐる。それに釣や釣道具に関する豊富な知識や談義が加わる。（先輩から聞いた話）との具體的な比較はできないが、（もつと怪談めいて伝わった筋）という差異——例えば幽霊が竿を取り返しに来たのを豪胆にも追い返したとか——があつたのである。また、塩谷贊によると、竿の銘を（指切）から（指折）に変えたところだけ聞いた話を直したと聴いた後（私が露伴に、「それでも舟で帰つて来るあたりの景色はどうですか」と問うたら、

「あれは自分の経験をつかつたのさ」という返事を得た」ということである。不漁故に遅くまで海上にいて、空は曇る、日は暮れるという経験が露伴にあつて、立つたまま波間に浮き沈みする釣竿に遭遇するという一寸珍しい話の状況設定に用いたのである。「反故のうらがき」に時刻の記述はないが、釣は好調で（品川沖を東へ釣行ける）のだからまだ陽は高いと思われる。そういう真つ昼間では無気味さは出ない。このように話の細部や筋を変えたり、話題に相應しい状況を設えたりする創作意識が露伴にはあつたのである。

「幻談」の海の話ひいては「幻談」そのものの眼目は、死者の釣竿を手に入れた日の翌日の夕方の出来事である。釣竿を握りしめている水死者に出会うことは、珍しいとはいへ、合理的な説明のつかないことではない。露伴の推測するように何らかの発作のせいで水に転落した持ち主の竿への執着の末か、それこそ藁をも掴む思いの結果かであろう。次の日、件の竿を持って前日の船頭とまた釣に出ると、〈釣れるは、釣れるは〉で、そのために遅くなって、暮方になる。そうして〈丁度昨日と同じ位の暗さになつてゐる時〉、〈薄暗くなつてゐる水の中からヒョイ／＼と、昨日と同じやうに竹が出たり引込んだりします〉ということが起きる。滅多にないことに二日続けて遭遇すれば、当然驚

くし、気味悪くもある。客と船頭は互いの顔を見、〈お互に何だか訳の分からない気持〉になる、そこへ〈今日は少し生暖かい海の夕風〉さへ吹いてくる。昨日のはありうることだが、今日のは怪異、という思いがふたりをとらえたはずである。船頭が強がつて、〈怪をみて怪とせざる勇氣〉を奮い立たせるのは、気味悪さまたは恐怖の裏返しにほかならない。彼は〈竿はこつちにある〉と繰り返す。こつちにある以上あつちにはないはず——それは、いま波間に見える竹（竿）が幻覚で、実際には存在しないのだと自分に言い聞かせる台詞である。例の竿はあやかしの竿で日暮には元の持主の手に戻つて、日々舟行の人を呼び寄せているもので、自分たちは見入られたのではないかという不安を打ち消したのである。その気持は客の侍にも伝染して、先程苦裏に上げた例の竿の有無を確かめさせる。

（もう暗くなつて苦裏の処だから竿があるかないか殆ど分らない。却つて客は船頭のをかきな顔を見る、船頭は客のをかきな顔を見る。客も船頭も此世でない世界を相手の眼の中から見出したいやうな眼つきに相互に見えた。）

と、この事態をふたりは〈此世でない世界〉の存在で解釈して納得しようとする。科学的思考の発達した現代とは違う感覚に生きた彼らにとつて、それは自然のことであつた。

そこで死者の魂の竿に対する執着を感じた客が念仏とともに竿を海に返す結末は、江戸時代の人としては当然であった。

このままなら、海の話は怪談で終る。しかし、たぶん客が手探りしたのであるう、竿は苦裏にあつた。波間に浮き沈みする（竹）は前日の竿とは別物であつた。流れて来た唯の竹が釣竿に見えただけかもしれない。濡杖を見誤つたのかもしれない。あるいは何も無いのに見えた幻覚であつたかもしれない。

なぜそんなことが起こつたか。前日と同じくらいの時刻、同じようなコースの帰路であれば、ふたりの心には自然に前日のことが浮かんでいたはずである。現に客は竿の銘を考へていた。だが、好い竿を手に入れて満足な客、昨日の分の埋め合わせもできたような豊漁で面目をほどこした気分の船頭の双方の胸の底には、水死者が死んでも放さない高価そうな釣竿を無理やり奪つたことの後ろめたさがあつたと思われる。また、軽く念仏を唱えただけで死者に対して非礼だつたことを恥じる思いもあつたろう。それらの思いが暗示となつた場合、他の物が釣竿に見えたり、ありもしない釣竿の幻影を見るのはありうることである。それが露伴の解釈——怪異は心が見せる幻であつて、超自然の怪談はないという近代人露伴の解釈である。題名を「幻談」

とする所以がそこにある。

この解釈は、山の話の結末に添えた（古い経文の言葉に、心は巧みなる画師の如し、とございます。何となく思浮めらるゝ言葉ではござりませぬか）という解釈とみごとに呼応する。彼は二つの話をおなじ解釈で結びつけたのである。幽霊の正体がすべて枯尾花とは限らなかつた時代の話で露伴は唯心論で説明した。現代の心理学もしくは精神医学なら共同幻覚として扱うであろうが、現在でさえ確立されたとは言いがたいこの概念が当時はまだそう広く知られていたとは考えられない。露伴がそれを知っていたかどうか分からないが、現代の心理学の知見に通う解釈に仏典によつてたどり着いたところに彼の面目がある。

「幻談」を幻想文学とか怪談とか呼ぶのは、誤りである。むしろ露伴は、超自然とか怪異とされる話題の真実をここで合理的と考へる解釈の光の中に晒し出したのである。日露戦争後、作り話である小説を書くことに疑いを持つようになつて以来、彼が怪力乱神を語ることを止めた事実を想起したい。

とは言え、「幻談」の魅力は、怪異を迷信と片づけもせず、心の作用と解釈する新しさや解釈がついて安心することにではなく、一瞬でも玄妙な（此世でない世界）を垣間見せているところと無から有をつくり出す人間心理の底暗さを

暗示することにある。露伴の解釈を知る前に、読者は一瞬ぞつとするはずだし、そのあとで意識下の不安がいかに人を操るかに思い至るのである。特に後者に関してあえて言えば、戦争に向かつて突き進む、言わば国家規模の共同幻覚に支配された時勢の根にまで届く認識を含んでいたのではないか、と思わせもする。山の話の四人（事實は三人）、海の話の二人と居合わせた者全員が同じ幻影を見る事態が全国民に拡大したとしたら、——同調しない者には（非国民）〈国賊〉という排除のレッテルがすであつた——国を挙げて幻影を信じ、雪崩をうって一つの方向へ進むしかない。露伴はそういう事態を憂うる気持をこの作品にひそかに忍ばせたのかも知れないのである。